



文芸雑誌 Discord 創刊号	
目次	
p 1	はじめに、目次
p 2	特別企画 <b>鎌田先生との座談会</b> 「総合政策学部ってどうなの？」 特別とあるけど今回のメイン
p 1 3	おまけ企画 「授業料は単なる経済的アクターか？」 バイトやってる人必見
p 1 5	編集後記

## 特別企画

### 鎌田先生との座談会

#### 「総合政策学部ってどうなの？」

三田市某所にて鎌田先生を囲む座談会開催

精鋭(?) 四人が選ばれ

収録は五時間に及んだ……

#### 登場人物紹介

鎌田先生

春学期金曜日の「哲学概論」を教授。今年は基礎ゼミも

ミネマツコウタ……企画兼編集長兼ライターもどき

クニエダイサオ……鎌田ファンRF実行委員プログラム運営担当、

よさこいまつり実行委員総務部

ミキヤスヒロ……RF実行委員新入社員、合気道部所属

キョシヨウラク……留学生。今回熱い要望で飛び入り。

#### 「1章 少し遅れて先生到着」

生徒A「鎌田先生到着です」

(以下生徒はアルファベット表記)

鎌田先生「あーもうみなさん頼んだんですか？」

(以下K)

A「先生とりあえず**ドリンクバー**だけたのどきました」

K「すいません車のガソリンがなくなっちゃって、よりによってチカチカし始めまして」

一同(笑)

メニユーを決めるために、少し時間経過……

C「先生お決まりですか？」

K「いいですよ」

B「とりあえずなにか頼みましょう」

ピンポン(オーダー)

A「あつ、俺まだ決まっていなかったりするんだけど……」

一同「えっ？」

K「これなんかおいしいですよ、若干往年より小さくなりましたけどね」

A「**和風サラダうどん**……いつときましようか」

B「僕がラーメンにしろって言っても聞かないのに・・・」

(Bはいささか不満げな顔をする)

店員「おきまりでしょうか？」

A「和風サラダうどん」

B「イタリアンハンバーグとラーズライスと**山盛り**ポテト」

C「チーズハンバーグ」

店員「チーズハンバーグおひとつ」

C「あとあんかけチャーハン」

一同「おー」(感嘆)

D「若鶏の鉄板焼き」

店員「ソースは・・・」

D「ガーリックで、あとさっききたのんだドリンクバー5つ」

K「鉄火井とかき揚げうどん・・・ちょっと**後悔**してるんじゃないな

い？だって安いよこれ」

A「そんなことはありませんよ。まあ確かに安いですねサラダうどん」

C「腹減るよ」

A「まあとりあえず様子見つてことでいいんじゃないですか」

B「ドリンクバー行きましょう！」

K「交代で行きましょうか。みんなでそろそろいってもなんですし」

A「お先にどうぞ。留守番してます」

## 〈2章 メニューが届く〉

(先生が帰ってくる)

D「先生この飲み物はなんですか？」

C「抹茶ですか？メロンか、青リンゴか・・・」

K「これは**オレンジ**と**メロン**を混ぜたんです」

D「ためしますねー」

K「だって私たちそういう思考実験のできる人間じゃない？まあこれは私の**定番**だから」

D「うまいですか？」

K「えっ？うん、あのねオレンジジュースを4に、メロンソーダを1」

C「1ですか・・・へえ」

K「するとちょっとメロンの香りもちょっと入って、色も程々で・・・」

D「色は・・・でも、程々ですかね、これ・・・」

C「**微妙**な色ですよ」

(Aが帰ってくる)

A「先生、なんですかこれは？」

K「みんな聞いてくるね。そんなに興味深いかな」

B「本題には？さつさと入らなくて良いの？」

A「えっ？」

(この時点でのオーダーはAのみだが、Aはサラダうどんののびを気にしている)

A「まあ本題にはみんなのオーダーが届いてからで」

店員「鉄火井とかき揚げうどんになります」

K「日本つていうのは待たないでいいんですよね？頂きます」

(Aは、えっ？待たないの？という顔をする)

A「あーすいませんそれじゃ僕もお先に」

B「待たないといけないというのは？」

K「いけないというんじゃない、だからマナーつて言うのは、した方が良いだから・・・」

C「そういうのつてありますね。先輩と一緒にの時とか」

K「しかもこういうところつてできた順にできまますからね」

A「そしてうどんは伸びる」

K「そのうどんは伸びませんよ」

A「えっ？伸びないんですか」

K「最近のうどんはよく締めてるんでしょね、そう容易には伸びません」

A「確かにだまされてるんじゃないのつていうほど**「ん」**がある」

K「そうでしょう？変でしょう？何かあるなと感じるのが普通です」  
B「普通か・・・普通つて何だろうな」

### 〈3章 総政つてどうなの？〉

A「今日集まっていたいたしたのは、まあ今日は簡単に**総政**について話を聞きたくつて、総政つて言うのは理系と文系で言うつと、文系に近いと思つんですが、**文系つて役に立つのかな**つていうのがあつて、まあそういうことを話してみたいワケなんですよ。本来、総政つて言うのはどういう理想のモトに・・・」

店員「すいません、**あんかけチャーハン**のお客様。これで」

注文以上でしょうか？」

D「はい、あーごめんなさい」

A「理想を語つていたら、**あんかけチャーハン**に崩されてしまった」

一同(苦笑)

B「恐るべし、あんかけチャーハン」

A「まあその、**理想**の総政はどついうものか。あと**現状**はどつう

かということ話をしてみたいわけです。まあ大枠はそんな感じ」

一同（沈黙）

A「とは言ったものの、こんなおいしいそうなものが目の前にそろった状況で、お話をしていくのは非常に困難かもしれませんね」

K「別に、わたしは話を聞いてはいますけどね。関心がそっちに向いていないっただけで」

A「ははは、そうですね五分くらい待ちましようかね」

一同（食する）

#### 〈4章 こんな問題を持ち出した理由〉

K「食べようとしてるところを悪いんだけど、どうしてそんな問題を持ち出そうと思ったんです？総政の存在意義とか、文系と理系とか」

A「うーん、この前法学概論の授業にでた時に、一回生の人が話していたんですけど、法学なんて**法学部**で学ばばいいじゃない」

「つて言うのが聞こえてきて。まあ僕は一年勉強してきて、二回生なわけだし、なにか言ってあげたいんですけど言葉がでてこない。分からない。」

総合政策って幅広く学んで、専門を極める。言ってみれば**Dの字**

**型**のようになっている。でもそれって他の学部でも出来ることであっ

て、それじゃあ総合政策で学ぶっていうことの意義は何なのかなと思ったり。どういう理想を抱いて・・・えーとまあ、現に何人もここに学生が集まってくるっていうことはやっぱり何らかの理想があつてのことだろうし・・・」

（ひと休み）

A「あと**景気回復**とか言う政府のスタンスとかみていたら、技術力で日本は勝負みたいところがあつて、それって結局は**理系学**

**部**のことじゃないですか。文系学部や総合政策学部って社会の役に

立つてると言えるのかな？よく分からない。結局、理系学部なしには文系学部は生きられないと思うんです。医療にしろヒトゲノムにしろバイオテクノロジーにしろ兵器開発にしろ、もしも理系が暴れ出したら政治家も教育者も企業人も屈するのではないかな。まあそんな感じですよ。とりあえず食べましようか」

K「いま**社会の役に立って**言っただけ。どういふことをしたら社会の役に立つと言えるの？」

B「あーそれは思っな」

A「僕が思うには、といつかつねづね思っていることが、例えば環境問題を解決したいと思っただ時に、理系学部が環境問題をなくする物質を開発してしまえばいいわけで、総合政策学部があれこれやってみてもそれは**間接的なアプローチ**で、結局それは理系のお仕事というか、理系が頑張るのが手っ取り早いような気がします。もしたら**社会の役に立つ**・・・。

受験なんかみてもみると、文系理系やたらとりあえず理系にいけみたいな風潮があつて、優秀な人は理系に行く、医学部に行く。それは就職のこともあるし。まあ文系っていつても、法学部、経済学部、文学部など色々あるから一概には言えないと思うんですけど」

一同「ふっ」

K「うーん、今みんなの顔を見ていたんですけどね・・・」

A「いいのかなあ、**こんなテーマ**で」

K「これはもう**徹夜で語り明かしても終わらない**テーマですよ」

A「そうですね」

K「だからそういうテーマってそれこそN澤さんやN村くんとかがいた頃なんかには、よく私のところで徹夜で議論してましたよ。独

り身だったから。**総政**が出来た頃ってあちこちでそういう議論がされてましたよ」

A「ふーん」

K「そう考えると君たちは**特殊**ですね。まだこんな人がいたんだっていう感じ」

B「そんなに特殊ですか」

K「ええ**特殊**です」

一同（笑）

へ5章**専門のないわれわれは不利なのか**

D「僕はこの学部好きです。なぜならこの学部では、経済や商学だけでなく**いろんな知識**を勉強することが出来ます。

でも問題は、僕はこの学校卒業したあと経済方面の仕事をしたり知識をつけたい。この学部で四年間勉強して深い知識を付けても、社会に出て経済学部から来た人と比べると**低い**と思います」

C「うーん」

D「彼らより良いところは、ただ経済だけじゃなくて他の方面の知識も持っている。弱いところは専門知識が彼らより低いということ。僕は今年一年間、経済、哲学とかいろんなことを勉強しましたが卒業したあとの進路は**心配**ですね」

C「でもそれは総政の長所であり短所であるところやから。広く物事見れるけど、専門は専門学部には及ばない・・・」

K「大学を卒業して就職する場合、それは**不利**になってない

と思いますよ」

A「そうですか？」

K「どうしてかっていうと、経済学部でも法学部でもいいです、学部によって違いますけど、専門を三回生から初めて三回生の終わり頃には就職活動ですよ。で多くの人はそれで**勉強**終わりです。そうやって考えるとほんの一年の間、どこをやったからといって社会においての役割はゼロみたいなもんですよ。いざ会社に入って**会**

**社の法律問題**を扱えるかっていうとそれは無理でしょう。

ある意味で日本の大学っていうのは、理系は別ですが、少なくとも大学出身者には、文系の場合は、オンザジョブトレーニングでいく

んだと。要するに何を勉強したかではない。どういう知的な能力や社会観を持っているかという**一般的なスキル**の方が問題になる。

そういうふうになると実際の社会的には、総政は専門とかいうことで**損**はしていないと思う。今までの卒業生なんかみていて、なにか

科目足りないから不利だっていう話は聞いていないし。はっきり言って**プロ**が使うような経済や政治や法律の資質に比べたら大

学で学ぶことなんかは・・・」

C「ふーん」

K「そういう意味でいうと、専門が専門として育たない状況においては、総合政策のように**あらゆるところに対応**できるような知識とか知的な能力を持って社会に出ていった方が、私は強いと思うし、まあそれは人によりけりだけど、実際社会に出て活躍している人を見てみると、そういう総政の勉強の仕方がプラスになっていると思います」

《6章 もう一つの例》

K「例えば、それこそこれは総政だったからできたと思うんだけど、

私のゼミでWEBマスターをやっていた・・・HPがあるじゃないですか私のゼミの・・・結局私もコンピューターの勉強したくて、学生と一緒にやっているうちに出来るようになってしまったんですけどね。大学の間に情報処理・・・今は名前変わったかな・・・2級

かなんかそういう資格を取って、勉強して結局**大学院**に行くとか言ったんですけど、就職活動してみたら一発でIBM、いわゆるソフトウェア開発面ですよ、そこにいつちゃって。むこうからも**是**

**非来てくださ**いってというのがあって、学者の生活って言うのはいつ芽が出るか分からないところがあるし、いいんじゃないかっていう話になって

A「すごいですね」

K「いまこうやって話してて、みなさん**コンピュータ**に詳しいのかな？例えばJAV Aって知ってる？」

B、C「知ってます」

K「ある意味でこれからのプログラム言語ですね。インターネットのメインになって行くであろう。彼は、その**先端**の、言ってみれば

**ば花形**の部署に配属されたそうです。工学部とかいるんな人がいるのですよ。彼は社会の中で実際そういうふうに行っているわけです。就職一年で、コンピュータ専門誌に記事ががんに書いています。聞いてみると、大学の時にやったことなんて就職してから一生懸命やればすぐに追いつかれちゃうものだと。彼の場合、**哲学**っ

である意味**論理学**じゃないですか。コンピュータやるうえで重要な論理性を身につけられて良かったと言ってくれてますね」

B「コンピュータやってたからなんとなく分かります」

A「すごいですね。うちの学部からもプログラム関係に進める人がいるんだなっていうのが実感ですね。うちってめちゃ文系だし。まあ好きだから出来たんだろうけど。R大学はコンピュータの授業がつまらないから、学生が**自分の手で変えよう**と言っていい。裏コンピュータ演習だって。HPの作り方とか、ネット上のルールとか身をもって体験させるらしい」

C「違法じゃん」

A「うん、まあね。だけど僕はもともと理系の人間だからそういうのがすごく羨ましく感じます。あと**自分たちでやってやる**

う」という勢いがあるって言うのが羨ましい。うちの学部にいると特



に」

B「でも頑張っている人は多いと思うけどな。学園祭、サークル、

NGO、ボランティア・・・」

A「でもそれは自分の興味あることであって、自分の好きなこと、やりたいことだけをやっていていいのだろうか？たまには違う組織に入ってみるとか、他の団体からの**評価**を受けるだとか、他の団体に意見を言うだとか、そういうことは必要ないのだろうか？楽しんでだけでよいのだろうか」

B「言いたいことは分かる。つまり・・・」

K「あのすいません、**ドリンクバー**取ってきていいですか？」

## 〈7章 社会と大学〉

K「ひとり一学期で**新聞記者**になったKくんというのがいて、

まあ君みたいにちょっとこういふ感じの子なんだけど」

一同（Aの方をみて、「あー、はいはいこういう人ね」という顔をす  
る）

A「ははは、どういふ感じやねん。でも僕はその人のHP見たこと  
ありますよ」

K「彼もいつもカメラとかレコーダーを持ち歩いては、あのころ学  
内新聞を作っていたわけなんですよ。**新聞部**とかにも入っていて、  
でも学部の新聞も出したことによってやってただけで、で  
もだんだん周りの人が飽きてきて、何巻かでおわちゃったんです」  
A「そういうのはありますよね」

K「当時はメールなんかできる子もあんまりいなかった。**Windows**  
をインストールするのもフロッピーが30枚くらいだったんです  
よ。CDなんかないから。研究室とかをまわるとそういうのがぞろ  
ぞろでてくるわけですよ、**百枚**くらい。彼はそれを全部フォーマ  
ットしてそれにコピーして、紙ではなくフロッピーの新聞を出した  
んです」

B「たいした**根性**だ・・・」

K「彼はまあそういうのが重なって、Y売新聞にいったんです。そ  
れだつてある意味で、本当にそういういろんなことをやって、私の  
ところでは環境倫理をやったり、**エコビタット**に所属したり、  
学部の間とかやつたり・・・」

B「先生のところはエコハビの人は多いですよね」

K「ハビタットは私のところに多く来るからね。ある意味普通のコースではあるんだけど。そういう感じでやってみたり。みなさんだったら、よさこい・・・なんだっけ？」

B「よさこいまつり実行委員」

K「そうそうそれぞれ、よさこいまつりとか。みなさんもそういう感じで**社会**にインターベーションをもち、**大学**では知的な学問的なことをきちつと学び、そういう**勘**をつけていったら私はそれが

すごい**資本**だと思うけどな。そのことに向かって目標を定めてやったというのは、それがハビタットでもよさこいでも他のゼミの活動でも、きちつとやったということであれば同じであると思う」

B「うちの学校でそういう社会に働きかける活動をしている人は多いと思うよ」

A「それを**リサーチフェア**で発表して欲しいね」

D「あれ？それって宣伝じゃないっすか？」

(Aが突然マイクをつかむ)

A「**リサーチフェア**実行委員会の宣伝なんかしていないよ、僕は」

K「若いつていいですね」

## 「8章 役に立つ？」

K「社会の役に立つという時、今の人たちは一つのことを前提としているんですよ。それは**経済的に役に立つ**ということですよ」

A「あーそうだ」

K「逆にいうと経済的に役に立つ以外のものは役に立たない。もちろんはつきりそうは言いませんし、そうじゃないって思いますけどね。でも実は頭の中では経済的に役に立つもの以外はどうでもいそう思いこんじゃうことでシフトがおこる」

B「政治家にする宗教にする本来そのものが持つべき価値が、経済的価値によって知らない間にそのもの自身の価値を失うって言うことですね」

A「知らない間に僕なんかは思いこんでいたよ。例えば今大学でトフルの点をあげますよ、とか資格のためにダブルスクールを開校しますよ、とかそういうのも価値が経済的価値にシフトしてるとことなんでしょうかね？」

K「でもそれはね、今の経済のレベルから言うと難しいですね。今の大学の評価って言うのは、ひとつは即戦力のある学生、もつひとつ

あっ宣伝だ！  
(-.-)y-.。o  
Reserch Fair HP  
<http://www.ksc.kwansei.ac.jp/researchfair/>

つは基礎力のあるどこでも使えるような学生と二つあるんです。もちろん経済界は簡単な話、両方持ったものが欲しいんです。大学にとっては**トレードオフ**で難しい。うちの大学なんかは、なんとかその両方を、高度職業人的教育と専門教育と関わらず総合政策をやりたいという理念があるわけです。実際簡単じゃないって言うことは分かっているんですけど」

### 〈9章 技術とお金VS環境倫理〉

K「例えば自然科学でないと環境問題は解決できないと言ったけどそれはそうおもっているだけかもしれない」

B「どういことですか」

K「いつかは科学が解決してくれるという思いこみ。 **カウボー**

**イ倫理**ってというのがあって、カウボーイがいた頃ってというのは、

アメリカの開拓時代に、まだ資源が**無尽蔵**にあったんです。そのころにアメリカの消費モラルは作られたわけです。開拓が西海岸にまで終わっても、アメリカ人はそのモラルから逃れられない、その

とき、さらにそれを続けるために**口実**としてできたのが『科学がいつか解決してくれる』という考え。それ自体問題ですが、私がここでいいたいのはそのいうことじゃない」

C「京都議定書とかCOPsとかの話ですか？」

K「そう、実際の話を見てみると、アメリカはCOPsから離脱した。日本は目標達成が危ない。それに対してヨーロッパはほぼ目標を達成できている」

A「そうですね」

K「一番**技術もお金**もあるアメリカがどうしてできなかったか。

それはつまりしようとしなかった。二番目に力と技術力のある日本がどうして危ないか。逆にドイツなんかは、技術なんかはアメリカに劣っているのに目標が達成できるのか。つまりこれは技術の問題じゃない。それははっきりとブッシュが言っている。すべて経済だと」

A「培ってきた思想の問題ですか」

K「持続可能な経済を犠牲にして環境政策はとれない。これははっきりした言葉です」

C「風力発電にしる水力発電にしるコストの問題があるからね」

《10章 下士官ではなく将校になれ》

店員「お客様、大変失礼いたします。こちらのフロアのほうですが、

**十二時で close** となっております。お時間おとりになるよう

でしたらむこうの席を御用意いたしますが、いかがいたしましょうか？」

K「いやもう引き上げます」

A「十二時か」

K「物事を解決するのは科学技術で、総政や文化系や社会科学系はチャンスがないのか？ってことですが、すべては科学技術で説けるって思いこまされていることが問題ではないかな。実際、経済力も科学技術もある**アメリカ**が環境に対して経済政策が一番遅れているというのが一つの例ではないかな」

A「つまりアメリカのカウボーイ倫理」

K「あるし、むしろ実効的な環境保護っていうのは、科学技術のレベルではなくて、むしろ国民の持っている**環境倫理観**とか世

論とか、サポートする議会システムだったりとか、色々あるんですけど

けどそういうものが重要になってくる。もちろん環境倫理観が高ければ上手く行くというわけではないですけど、非技術的な文化的社

会的ファクターの方が実際の環境保護には意味を持っている。そのくらい言っても問題ないんじゃないかな」

K「普通の日本人で価値といった時、経済的価値以外に追求するべき価値があると思ってる人はどのくらいいるんでしょうか？総合政策学部だつてそんなにいないでしょう。ましてや外に出たらいるんだろつか・・・もつというところ 大学 学科・・・」

A「おつと！そつから先は**放送禁止**ですね」

K「別に一カ所ぐらいかまわないと思いますけど」

A「でもそつなると**将校と下士官**の話になりますね」

K「そつ、下士官と将校の違いをよく話すんですが、**全体的な**

**ビジョン**をもって色々なものとの関係の中でもものを見ることができてるのが、あるいは常に他のものに目を向けることができるのが将校。目の前にいる兵隊を管理することだけを考えるのが下士官です。だから私は下士官で満足するな。**将校になれ**ってみなさん

にメッセージを送ってるんですよ」

A「おーいい言葉や。ん？しめですか？今何時？」

C「十二時だよ。いい感じでまとまったかな」

K「まとまってないと思いますよ」

B「でも、これだけ文章にしたら勉強になるだろうね（四時間半）」

店員「申し訳ありませんお客様もう十二時を過ぎておりますので」

K「ああ、すみませんもう出ます」

一同「それではみなさんご苦労様でした」

C「終電がおわつちまったよ」

（一同席を立つ）

自主休講してバイトをやってる人必見ですよ

《授業料は単なる経済的アクターか?》

我々学生が大学に払う金額は莫大で年間130万円に上る。

一方、講義があるのは長期休暇やテスト期間をのぞいた7ヶ月間である。

この事から計算すると一回の授業に対し

一人四千元から七千元を払っている事になる。

ここで典型的な大学生A君を例に取って考えてみる。

彼はいつも、**授業をさぼって**時給八百円のアルバイトをしている。

彼は1時間半働いて千二百円の給料をもらい得した気分になっているが

一回の授業料が四千元なので実際は二千八百円も損している。

A君の父は労働という行為を行いA君の大学の授業料に当てている。

これはA君の父の労働行為という価値を大学に渡し

代償としてA君に「知」という価値を得させるためである。

しかし、A君は授業をさぼってアルバイトをする訳であるから本来行われるべき「労働」と「知」との等価交換は行われぬ。当然、得るべき「知」を得なかつたA君の人材価値は下がる。

しかし、人材価値の下がる教育を日本はなぜ続けるのか?

それはアルバイトという物が日本経済にとって都合が良いからである。

アルバイトをしてお金を貯めた学生というのは

そのお金を使って自分の好きな物を買う。

本当に生活のためにアルバイトをする学生は殆どいないので

**アルバイトで稼いだお金は通常のお金に比べ**

**消費されやすい性質を持っている。**

これは日本の経済を回すのに都合がよく、GDP増加にもつながる。

またアルバイトは雇用主の側から見ても都合がよい。

なぜならそれほどスキルの必要でない職業では  
保険など面倒な手続き、高額な賃金を要する正社員よりも  
ただ安い給料を払えば終わる学生アルバイトを使った方が楽だか  
らである。

しかし、その学生アルバイトも学生を終えて就職となると

**立場が逆転する。多くの職場にアルバイトが採用されていて**

**なかなか定職に就くことが出来ない**のである。

これはある意味**自分の首を自分で絞めている**のと同じである。

この様にアルバイトという物には大きな問題点が含まれている。

**これらを知った上で自分はどう大生活を送るのか**考えてほしい。

なんてこった!(/-o-)/

ちゃぶ台

インタビュアー「どうも先生はアルバイトに関しては批判的ですが  
こう言ったサークル活動であるとかボランティアには  
肯定的であるように感じられるのですが  
この両者の決定的な違いとは何なのでしょうか？」

鎌田先生「ご指摘のように、欲望のモノカルチャー（単一栽培・単  
一文化）、およびそれを体現し、拡大再生産することによって自分自  
身も増殖する（できるとおもいこむ）貨幣経済にたいしては、私は  
批判的です。

しかし、商品価値がフェアに反映される枠内で機能する経済、ある  
いは欲望のモノカルチャー以外の価値を知っている行動は、それが  
意識されているなら、それぞれの存在意義があると思います。ボラ  
ンティアのほかに、芸術作品の創造、人格形成の一端として行われ  
るクラブ活動などです。（もちろん、ボランティア、芸術作品、クラ  
ブ活動なら、どんなものでもみなよい、というつもりはありません  
が。）

この問題は関学総政だけでなく、他の大学にもあてはまる（むしろそっちの  
方が深刻？）問題であると思います。だってうちの学校の人は授業さぼってと  
いうより、放課後や休みの日にバイトしてるでしょう？でも授業が一回七千円  
と聞いてびっくりした人もいますでしょう。七千円払って居眠りしてのか？とか、  
七千円払ってその価値のある授業を提供できているのか？とか色々思うことは  
あるでしょう。色々思ってくれてそれは大正解。それが私たちの意図です。

編集後記

読んでもらったら分かるように、総政にはいろんな先輩がいるということが分かります。そしてその方々がそれぞれに総政とはなにかを考えながら頑張ってきたのだということが分かりました。そして、今の学生が何ができるか、どうすればいいのかということをは非考えてもらいたい。総政ができた頃とは社会の状況も大学のあり方も変わりました。そういう流れに上手く適応してゆけるような学部であって欲しいし、学生であって欲しいと思います。

Manager というのは日本語では経営者、管理人、部長といった感じで訳されますが、こういった組織のトップに立つ人間に必要なのはまさにうちの学部の Mastery for service(スペルに自信がない)の精神であると思います。別にこの学部にいる全員がそういう Manager になるというわけではないと思うんだけど、いろいろな分野を学んでそれがたとえ浅いものだとわかれても、他の学部、理系や文系の各学部をつなげるような考え方の出来るというのは大切なことだと思います。

自ら率先して嫌なことでも、それに向かい目的のために行動する。主体的に偉い (high-ranking) というのは、えらい (exhaust) ということなのです。例えばどこかの組織の代表になって、権力をもった権限をもった。だから自分の好き勝手にする。他の人の意見なんか聞かないよ。

それはわざわざこんな山奥にやってきて、この学校、この学部に来てまで、学ぶことではないでしょう。

みなさんはこの学部についてどう思っておられますか？是非意見を聞かせて欲しいと思います。僕はあさってカナダに行くので、日本にはいませんが(いませんから?) お気軽にメールを下されば幸いです。まあ今回、僕自身がすごい勉強になったことがいっぱいあります。僕がやってる限りあと三回くらいはこういう本が出るような気がします。色々感じ取ってそれぞれがそれぞれの糧としてくだされば幸いです。

インタビューさせていただいた鎌田先生、アイデアを下さった藤田先生。留学までに時間がなく必ずしも満足のいく内容に仕上がらなかったことを恥ずかしく思いながらも、「とにかく出せ」というお言葉に尻を叩かれ続けやっと出せた次第であります。あと協力してくれたみなさんありがとうございました。やっとカタチにすることができました。この場をかりてお礼をいわせていただきます。

関西学院大学総合政策学部二回生 峯松航太

2002年5月13日

暴走族が最近妙につるさい

三田(さんだ)の我が家にて。

まだ日本にいるのかという

友人の声を聞きながら。



## 文士・開拓者・編集要員

### 幹部候補生募集中

もちろん幹部じゃなくても  
結構です。

興味のある方はメールで  
ご連絡下さい。

紙面でできることなら何でもやります。  
企画ごと持ち込んでください。

絵、小説、詩、エッセイ可。  
サークルの紹介でも可。  
基本は表現の場。

あと冊子の**御感想**も

お聞かせ下されば有り難いです。

[psbc1013@ksc.kwansei.ac.jp](mailto:psbc1013@ksc.kwansei.ac.jp)

( ^ ^ )\_且~~ ( ミネマツ )

DISCORD 創刊号

( 2 0 0 2 年 5 月 1 5 日 )

発行者

関学総政非公認団体

「明日から(仮)」

編集・発行責任者

ミネマツコウタ

[psbc1013@ksc.kwansei.ac.jp](mailto:psbc1013@ksc.kwansei.ac.jp)